

位置と環境

標高63mの鹿児島湾に面した台地の端が遺跡で、阿多カルデラの北端、断層海岸の先端部に立地し、湾を介した大隅半島が遠望できる。小牧3A遺跡とは小河川で侵食された狭小な谷により隔てられている。周辺は遺跡が多く南に小牧3A遺跡、北に尾越遺跡・露重遺跡などの旧石器時代、縄文時代早期などの遺跡が点在している。

調査の経緯

岩本地区県営畑地灌漑事業に伴って、指宿市教育委員会が調査主体となり、県内教育委員会の協力を得て、昭和52年6月(1977)から53年3月(1978)に30haの台地を対象に確認調査を行った。その結果、幹線農道建設により包含層が削平される部分については本調査を実施した。

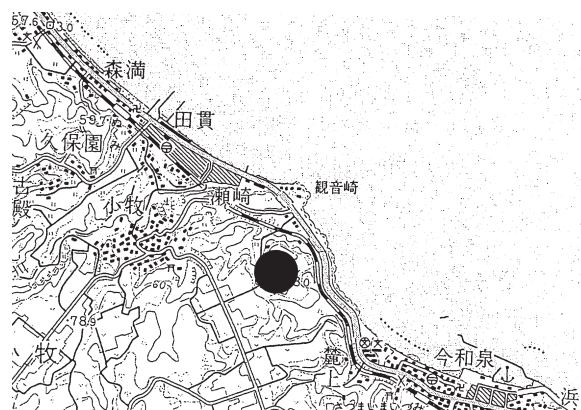
遺構と遺物

遺跡では火山堆積物(テフラ)が発達しており、上位から開聞岳テフラ・池田テフラ・鬼界テフラ・権現山火山灰・薩摩・岩本火山灰・始良テフラがほぼ水平に堆積し、遺跡の変遷を一望できる。遺物は9層と10層、上記の権現山火山灰層に包含され、大量の礫と共に出土している。

縄文時代の土器は、岩本1～4類土器を中心に隆帯文土器(6点)・前平式土器(1点)押型文土器(4点)が出土し、石器では打製石鏃(7点)・磨製石鏃(3点)・石匙(1点)・局部磨製石槍(2点)・両面加工石槍(3点)・石斧(9点)・ハンマーストーン・石皿(4点)・砥石(3点)などが出土した。

隆帯文土器は、口唇部を巡るように口唇部とその下に隆帯を貼り付け貝殻で文様を付けるものと、短い隆帯を縦方向あるいは横方向に貼り付けるもの、胴部に1本隆帯を巡らし貝殻で文様を付けるものがある。

岩本1～4類土器は、全て円筒形深鉢形で、平底の土器である。最大径は口縁部にあり、底部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がる形を成



第1図 岩本遺跡の位置

している。

特徴

隆帯文土器を含むこれらの土器は、岩本式土器と呼ばれ、近年縄文時代早期の筆頭に位置付けられている土器である。岩本式土器は、円筒形の単純な形で口縁部が強調され、さらに、器面の整形も独自の工具で丁寧に行い、ベンガラで赤色に塗彩するものもある。

石器では、磨製石鏃や局部磨製の石槍、両面加工石槍の存在など、先の縄文時代草創期の特色を引き継いでいる。一方、輝緑安山岩や凝灰岩に周辺加工で楕円形や台形状に仕上げた石皿の使用は、後出する前平式土器の時期にも引き継がれていくようである。

このように岩本式土器は、先の草創期の伝統を引き継ぎながら、一方では新たな生活用具を生み出している。新たな環境に適応し、生活スタイルを創造し始めた姿を内包している。

資料の所在

出土遺物は、県立埋蔵文化財センターおよび指宿市考古博物館時遊館 CoCco はしむれに保管されている。

参考文献

指宿市教育委員会1975「岩本遺跡」『指宿市埋蔵文化財発掘調査概報』
鹿児島県立埋蔵文化財センター1996「小牧3A遺跡・岩本遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』15

(長野眞一)



第2図 岩本式土器と共伴石器

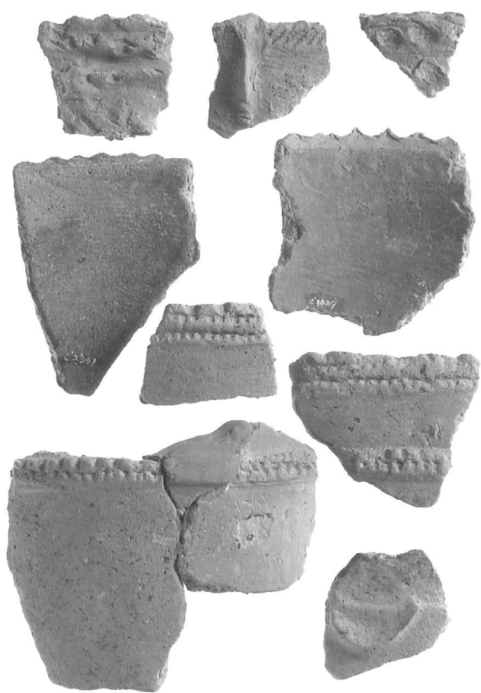
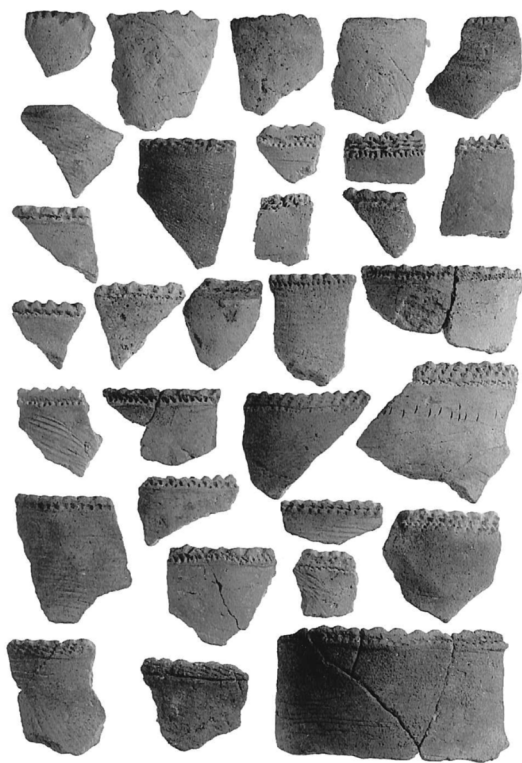


写真1 岩本式土器